

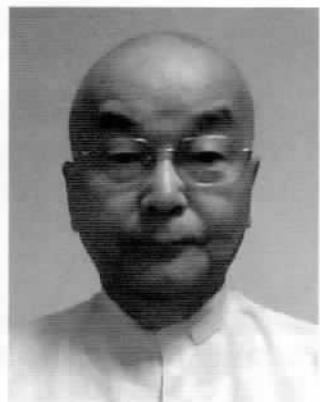
高島藤樹会

(題字は、竹脇豊卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740 (32) 4156

藤樹先生に学ぶ家訓

上田 藤市郎



最近の学校は、子どもの学力の向上を誇っているようだが、その学力を生かす高潔な人格の育成が不十分だと、品性のない政治家、悪徳企業家が育つことになる。藤樹先生の教えから、よい人柄が育つ家庭について考えてみたい。人間の幸せは、長寿に恵まれ、家族仲良く、子や孫も元気でいることである。世の中で一番大切なものは、一人ひとりの人間である。昔は、國のために命を犠牲にすることを強制されたが、今は、市民の幸せを守るのが、國や県市の責務である。人間は家庭で育つのだから、家族を大切にする子どもを育てることである。家族を守ってきたのは、その家の祖先であるから、祖父母や両親を尊敬し、丁寧なことばづかいをさせるのがよい。法事など親族が出会う機会に、先祖や故人の話を子どもに語り、感謝の気

持ちと宗教的な行事を大事にする態度を示す。隣近所の人には挨拶させ、行事に参加させて地域のことによく知っている子どもに育てる。今は、お金を出せば欲しい物が手に入る時代であるが、作られた物の打ちを考え、物に対するつましい気持ちを育てる。お金は、それを得る苦労を知らせてできるだけ使わない習慣を身に着けさせる。食べ物を粗末にせず分け合う。道具は共用し修理して長持ちさせる。最小限に消費することが美德であるという考え方を大事にする。ごみの分別、資源の再利用、再生など、環境に配慮した生活の仕方を子どもに実践させる。同様に掃除、整理、整頓を徹底する。

私たち人間は、家族の人のおかげで生まれ育てられたので元気で生きていられる。この人生はたった一回きりのもので、事故や病気、自殺などで死ぬようなことがないよう十分気をつけなければならない。自分の命はとても大切なもののだが、それはすべての人にとっても同様で、他人の命の大切なことは言うまでもない。毎日の生活でいやなことがあると、やる気がなくなる。だれもいわなことを望んでいない。だから、自分がいやなことを、人に言ったり、したりしてはいけない。人を差別する發言や争い事、國家間の戦争などは、いずれも、お互の心と体をひ

どく傷つけるから、絶対やつてはいけない。幼い子、障害のある人、病人の人、お年寄りなど困っている人は、その人が本当に望んでいることを聞いて、自分にできる範囲内で人を助ける行動力をもつた人になることである。

人間は、生まれつき美しい心をもつていると言われているけれども、その心をそのまま実行できるようになるには、やはり、不斷の気づきと心がけが必要である。子どもの心は純真だけれども、仲間をいじめたり心がけが必要である。子どもの心と悪い事をきちんと教え、良いことを実行する勇気、悪いことを避ける努力をくりかえさないと、しつかりとは身につかない。知識や技術を習得するのと同じように、美しい心とその実行力も鍛えることによつて磨かれる。心の勉強もとても大切である。

勉強やスポーツ、仕事あらゆる場面で、うそをつかない、ごまかさない、約束を守る、不正なことは絶対しない。また自分ができるからといつて、人をばかにする、いばる、えらそうにするようなことは、決してやつてはいけない。まっすぐ生きることで、周りの人から信頼される人になるよう努力させなければならぬ。

平成二十七年度

総会・講演会の開催

講演会

「吉田松陰について」

徳丸 和枝

六月十九日、安曇川公民館において、百二十四名の出席を得て開催されました。（委任状九十四名）

平成二十六年度の事業報告・会計報告並びに会計監査報告が承認され、続いて二十七年度事業計画・活動予算が報告されました。主な活動予定は次の通りです。

今年度の主な活動予定

- 藤樹先生映画会（三月）
- 藤樹賞の選考と表彰
- 論語指導教室（随時）
- 教材の研究・開発
- 紙芝居による啓発推進
- 学習会（藤樹先生に親しむ会）毎月第一日曜日
- 学習会（藤樹人間学習会）毎月第一土曜日
- 会報「高島藤樹会」の発行（年三回）
- 「高島藤樹会」のホームページ更新（随時）
- 「中江藤樹DVD」等の販売
- 大洲祭りで高島市物産の販売（事務局）



一六四八年藤樹先生が亡くなられた（三代家光の頃）後、百八十年余を経て（十一代將軍家斉の頃）吉田松陰は生まれています。

藤樹全集（岩波書店）に劣らぬ山口県教育委員会編の膨大な松陰全集。そこには「徳を成し材を達するには師恩友益多きに居る」（士規七則）など松陰の名言がつまっています。今年の大河ドラマを機に、年譜を辿りながら人物の一面をみていくたいと思います。

吉田松陰は五歳で山鹿流兵学を家学とする吉田家に養子に入り、十一歳には藩主毛利慶親に君前講義をするほどの神童ぶりを發揮しています。

十五歳で山鹿流兵学師範として独立し、立派な家学の継承者の道を進んでおりました。

ところが、二十歳を過ぎ、長州松本村から九州・東北・江戸と遊歴の旅を続ける中で、幕末思想家へと変遷していきます。

江戸で佐久間象山から西洋兵学を学びながら藩の許可書を持たず東北遊歴に出発したのが最初の暴走の始まりです。それは江戸藩邸から出奔の形となり、脱藩の罪により浪人となるも藩主に幕府批判の意見書提出、あるいは、黒船来航を目にすると「夷情をうかがう」とばかりにアメリカ密航を企てたり、一見暴走とも思える過激な行動ゆえ野山獄に投じられます。しかし獄中にあっても怯まず、入獄一年二ヶ月の間に六一八冊を読破し、孟子講義を行ななど、それは獄中の住人や番人をも虜にして、二十八歳で杉家に戻つてから、松下村塾主宰に至ります。

松陰の「仁政」に対するエネルギーは、京都で安政の大獄の指揮をとつて老中間部詮勝の暗殺計画にまで及び、結果的にはそれが因で斬首となるのですが、この短い二年余の松下村塾が何故に、後世にまで名が残る塾となつたのでしょうか。

幕末の私塾は大抵全国各地から選りすぐりの秀才達が師を求めて集まつていました。それに対し松下村塾は、近所に住むごく普通の少年、大半が十代で入門という異彩を放っています。その中学・高校生の年代

の門下生がのち長州藩の舵取りをしたり、明治維新の高級官僚になつて活躍するのです。歴史上に名を留めた塾生の数が多いのも突出しています。

松陰の我が身の危険を承知で行動する血気にはやつた行動も、若い門下生にとつては武勇伝や英雄のように映つたのでしょうか。少なくとも指導者の熱い思いが少年達の魂に火をつけた事は搖るぎない事実のようになります。

松陰像については時代によつて評価が問われます。過激、狂氣、松陰流の「仁政」の為ならば、人を誅める事も正義というテロリスト的な危険な一面、また、松陰死後国賊扱いにもかかわらず門人達は連名を以て先生の石碑を刻む程に仰がれる私心かざる者は未だこれ有らざるなり

（孟子）は、松陰語として現代でも奮起をうながす言葉として使われているのを目にする。

「慈母の愛も振り切らなければ國家の大事はできない」と門下生に叱咤してきました松陰ですが、処刑前夜に親に送られた辞世の句「親思うところにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん」を詠むと、この時になつてようやく孝の思想を思い起され落ち着かれたと思うに至ります。

藤樹思想を学び考え方実践する
田中 清行

四年前から始めた本学習会の内容を本会報の毎号で紹介します。

昨年十二月から『大学解・通解』を学んでいます。

五月十三日（水）夜、安曇川公民館で第45回学習会を行いました。

最初にTVで視聴したベトナムの禪僧、ティク・ナット・ハン師の話をしました。師は、コップの水とろうそくとマッチを使って、私たちの

禅僧、ティク・ナット・ハン師の話をしました。師は、コップの水とろうそくとマッチを使つて、私たちの条件が満たされたとき生まれ、条件がなくなると死ぬが、死は無で

のちはマッチで火を点けるように何かの条件が満たされたとき生まれ、条件がなくなると死ぬが、死は無で

太子以来、日本では大乗佛教が広がりました。根本は、仏の大悲があらゆる人々の脚下に届いている。そのことを信ずれば、苦行によらずとも救われると受けとめられてきた。ま

た、仏に抱かれている自己を自覚すれば、同じ存在である他者への尊敬も出来るようになる。日本の佛教徒の多くが以下に述べる大乗佛教の思想によっています。

その後、『大学』を素読後、教本「止まるを知りて後定まるあり。定まりて後よく安し。安くして後よく慮る。慮りて後よく得」を学びました。この中の「止まる」の意味は止揚ではないかと皆で話し合いました。その後、懇親会で楽しみました。

七月四日（土）、安曇川公民館で第47回学習会を行いました。

最初に次のように話しました。空海の密教の教えは、人や動物は自然の中での同じ生命を生きている。生死を考えるとときは、大自然



『大学』
『孝』
の思想と
繋がつて
いるので
はないか
と思いま
す。

素読の後、明徳、親民、至善について、先生の主意を読み、当時の時代背景やその教えが永続している理由等について皆で話し合いました。

六月から曜日、時間を変更して土曜日六日の午後、ウェストレークホテルで第46回学習会を行いました。

最初に次のように話しました。T

Vで日本佛教のあゆみを視聴。聖德

太子以来、日本では大乗佛教が広が

りました。根本は、仏の大悲があら

ゆる人々の脚下に届いている。その

ことを信ずれば、苦行によらずとも

救われると受けとめられてきた。ま

た、仏に抱かれている自己を自覚す

れば、同じ存在である他者への尊敬

も出来るようになる。日本の佛教徒

の多くが以下に述べる大乗佛教の思

想によっています。

その後、『大学』を素読後、教本

「止まるを知りて後定まるあり。定

まりて後よく安し。安くして後よく慮る。慮りて後よく得」を学びました。こ

の「止まる」の意味は止揚ではないかと皆で話し合いました。その後、懇親会で楽しみました。

最初に次のように話しました。空

海の密教の教えは、人や動物は自然

の中での同じ生命を生きてい

る。生死を考えるとときは、大自

の言葉を聴き、その生命をつないでいく。繼承の中に幸せがある。「利他」の心が大切。

教本について「物に本末有り。事に終始有り。先後する所を知れば、即ち道に近し」のところを学びました。フリートーキングでは「徳とは何か?」等について話し合いました。

八月一日（土）午後、安曇川公民館で第48回学習会を行いました。

最初に次のように話しました。浄土

教は、阿弥陀仏の本願が根本になつ

ています。人間というものはいくら

努力しても煩惱から逃れられない存

在である。自力ではどうしても救わ

れない存在である自分に絶望した挙

句、仏から慈悲を受けている存在で

あることに気付き、それを信ずることにより救われる。そういう他力を

教えているものが浄土教でしょう。

教本について「古の明徳を明らか

にせんと欲する者は、治國→齊家→

修身→正心→誠意→致知→格物に有

り」を学びました。すべてが格物につながつており、格物は五事を正す

ことです。

児童虐待等の現実を見るとき、五

事を正す教育がいかに大切であるか

等について話し合いました。

最初に次のように話しました。五

事を正す教育がいかに大切であるか

等について話し合いました。

最初に次のように話しました。五

事を正す教育がいかに大切であるか

等について話し合いました。

最初に次のように話しました。五

事を正す教育がいかに大切であるか

等について話し合いました。

「馬方又左衛門」の紹介③
(解説)

「正直で誠実な馬方又左衛門」として名を残した若者は、西近江路の川原市(現高島市新旭町安井川)に実在した『中西又左衛門』という人です。豪農で

広い田を家族と耕作するかたわら、人や荷物を運ぶ馬方の仕事をしていたのです。又左衛門は、時間があると、夜は、小川村の藤樹書院に通い、先生の『良知の教え』を学びました。父の後を継いで家業に勤しみ、晩年は、川原市の庄屋を務めた徳の厚いりっぱな人であったと伝えられています。

このお話の後半に登場する『藤樹先生』は、細々と一人住まいをしていた母(現在の藤樹書院)で勉学に励んでいました。先生の学徳を慕つて、大洲や京都、近江各地から、門人たちが学問所に孝養を尽くすため、四国の大洲藩を脱藩して生まれ故郷の小川村にもどつてきました。先生の学徳を慕つて、大洲や京都、近江各地から、門人たちが学問所

にせんと欲する者は、治國→齊家→修身→正心→誠意→致知→格物に有り」を学びました。すべてが格物につながつており、格物は五事を正すことです。藤樹先生の『良知の教え』を学び大切にしていた暮らしていたのです。

物語は、馬方又左衛門が、殿様の命令を受けた加賀の飛脚を、川



原市から、七里（約三十キロメートル）離れた榎の宿（現大津市和邇）まで乗せた日の実話に基づいたお話を。

又左衛門は往復十四里（約六十キロメートル）も馬を引いて歩き、一日の仕事を終えた時、大金の忘れ物に気づきました。飛脚が困っているだろうと考え、疲れた体も厭わず、榎まで一心に走って届けました。宿屋へ届けた時の、誠意とすがすがしい言動が、飛脚やその場にいた人々に大きな感銘を与えました。

この話には、「正直馬子」あるいは、

「正直馬方又左衛門」等、ほとんど「正直」が付けられてきました。一般の庶民が大金を手にする機会は、ほとんどなかつたというこの時代です。大金を出すれば、心が揺れるのが当たり前であつたことを背景に考えますと、この話が、驚きと大きな感動を持つて語り継がれ、馬方又左衛門に「正直」という称賛の言葉が付けられたと思われます。



飛脚 「私の仕事は、飛脚ですから、こちらの方は何度か来ていますよ。（間をおいて）しかし、このびわ湖は、いつ見ても大きくて美しいです。

こんな話をしながら、八里ばかり（約

三十キロメートル）南の「榎の宿」の宿屋まで、お客様を送りました。又左衛門

は、馬の首をなでながら、「さあ、もう一度川原市までがんばろうや」と、声をかけ、来た道を戻つて行きました。

（紙芝居）

①ここは、びわ湖の西岸、「川原市」（現高島市新旭町安井川）という宿場



（駅のこと、宿屋が多い）です。今日も、旅人や町の人で、にぎわっています。

又左衛門は、この職場で、馬にお客さんを乗せて運ぶ馬方の仕事をしている若者です。

②ある日、又左衛門は、朝早くこの川原市から、「榎の宿」（現大津市和邇）まで、お客様を乗せて行くことになりました。

又（又左衛門） 「客さん、それでは出発させてもらいます。」

飛脚 「馬方、どうかよろしく頼みますよ。」

又 「お客様は、びわ湖の方ははじめてですか？」

飛脚 「私の仕事は、飛

脚ですから、こちら

の方は何度か来てい

ますよ。（間をおい

て）しかし、この

びわ湖は、いつ見

ても大きくて美しいで

すな。」

（現在の約二～三千万円）もある。

④又 「どうしてこんな所にお金があつたんやろう？ あつ、先ほどの飛脚さ

んかな？ なくしたらあかんと思つて、しまい忘れたんやろうか。きっと

そうや。たくさんのお金をなく

したと思って、困つてゐるぞ。早く

届けてやろう。」

又左衛門は、急いで

馬にえさを食べさせ、

休ませました。それか

ら、大切な小判の入つ

た袋をふるしきにしつ

かりと包み、自分の体

：（次のページを半分まで 抜く）：



③川原市までようやく戻った又左衛門は、「今日は一日中、よく歩いたな。ご苦労さんやつた、疲れたやろう。」と、馬にやさしく声をかけ、水を飲ませました。又左衛門は、馬の背中から鞍を下ろしたところ、どさつと重い包みが落ちてきました。

又 「あれっ、何だこれは？？」

：（残り、半分をさつと抜く）：又左

衛門は、その袋を拾い、袋の中を見

て、「わあ」と、大きめの声を上げまし

た。中には、たくさん

の小判が入つていて、

いたのです。

数えてみると、

（現在の約二～三千万円）もある。

又 「わあ、二百両

たいへんや。」

又 「どうしてこんな所にお金があつたんやろう？ あつ、先ほどの飛脚さ

んかな？ なくしたらあかんと思つて、しまい忘れたんやろうか。きっと

そうや。たくさんのお金をなく

したと思って、困つてゐるぞ。早く

届けてやろう。」

又左衛門は、急いで

馬にえさを食べさせ、

休ませました。それか

ら、大切な小判の入つ

た袋をふるしきにしつ

かりと包み、自分の体

にくくりつけ、ふたたび榎に向かつて、

走り出しました。赤い日は沈み、周りは

すっかり暗くなりました。

しばらく走ると、又左衛門の足は、い

たくなつてきました。急いで出て来たの

で、腹も減つてきました。足が思うよう

に進みません。又左衛門は、くじけそう

になりましたが、飛脚のことを考えて、

自分を励まして走り続けました。

さて、榎の宿では、飛脚が体をぶるぶ

る声で震わせながら、宿屋の主人や、お

客たちに泣きつくように言つていま

す。

飛脚 「お金がない。どこかで落としてしまつたのか。いくらさがしても、

お金の入つた大事な袋がないので

す。加賀のお殿様から預かつた大事

なお金です！。ああ、どうしよう。

お金が出でこなければ、私は打ち首

になる。私ばかり

か、家族も重い罪になつてしまふ。」

宿の主人は、驚いて

たずねました。

主人 「一体、その袋に

は、いくら入つていたのですか。」

飛脚 「三百両です。」

主人 「えつー、一百両も！」

宿の主人もまわりにいた泊まり客た

ちも、こしが抜けるほど驚きました。

みんな 「たいへんだ、みんなで搜してあげよう。」



宿の主人と泊まり客たちは、庭から建物のすみまで、一生懸命捜しましたが、やはり見つかりません。：（次のページは半分抜く）：

⑥飛脚「あー、もうこれまでだ。私的人生は終わりだ。ウゥツー。」

どうとう、飛脚は泣き出しました。

みんな「かわいそうだけど、そんな大金はもう返つてこないよ。」

みんな、気の毒そうに飛脚を見ながら、言いました。



（ここで全部を抜く）：

その時です。ハアー、ハアーと息を彈ませながら宿屋に飛び込んできたのは又左衛門。飛脚の顔を見つけると、大声でたずねました。

又「飛脚さん。何か忘れ物をされませんでしたか。」

飛脚「お殿様から預かつた大事なお金をおなくしてしまったのです。何か知りませんか。」

（7）又左衛門は、流れる汗も拭わず、体にくくりつけていた包みを大急ぎで開けて見せました。

又「飛脚さん。これと違いますか？ 家に戻つて、馬の鞍をはずしていたら、その間から落ちてきたのです。」



飛脚は、震える手で袋のお金を数えました。お金はきつちり二百両ありました。

飛脚は、袋を手にし、心から喜んでボロボロ涙を流しました。

（8）飛脚「ありがとうございます。」

飛脚は、何度も何度もおじぎをしてお礼を言いました。

又「それなら、今ごろは休んでいるとこを、ここまで届けた駄賃（運び賃）に二百文（約五千円）いただきます。」

みんな「飛脚の気持ちだから、少しはもらつてあげなさいよ。」

又「それなら、今ごろは休んでいるとこを、ここまで届けた駄賃（運び賃）に二百文（約五千円）いただきます。」

みんな「たつたの二百文かい。」

みんなは、又左衛門の言葉に、思わず声を上げました。

（10）又「宿屋のご主人、すみませんが、私はこの二百文で、飛脚さんと、いつもにお酒が飲みたくなりました。どうぞこのお金でお酒とおつまみを用意していただけませんか。」

宿屋の主人は、喜んで酒とつまみを運んでいます。

飛脚「そ、それです！ それです！」

言うなり、飛脚はへなへなと座り込んでしまいました。

又「きっと、飛脚さんのや、困つておられるやろうと思つて、大急ぎで來ました。……ああ、来て良かつた。それでは、中身をしつかり確かめてください。」

飛脚は、震える手で袋のお金を数えました。お金はきつちり二百両ありました。

飛脚は受け取ろうとしました。

又「私は飛脚さんの大事なお金を届けに来たんです。当たり前のことをしました。お札はいりません。」

又左衛門は受け取ろうとしました。

飛脚は、袋を手にし、心から喜んでおじぎをしました。あなたは、私の命の恩人です。」

飛脚は、何度も何度もおじぎをしてお礼を言いました。

又「いいらない」と言うのです。周りには「いいらない」と言うのです。周りには「いいらない」と言うのです。周りには「いいらない」と言うのです。周りには「いいられない」というのです。」

又左衛門は受け取ろうとしました。

飛脚は、袋を手にし、心から喜んでおじぎをしました。あなたは、私の命の恩人です。」

飛脚は、何度も何度もおじぎをしてお礼を言いました。

又「いいへんな忘れ物だったのです。ただ、私は尊敬している先生の所で、いつもいつも良い話を聞かせてもらっています。私だけではなくたくさん的人が、先生から聞いたことを思い出して、正しいことを行うようにしています。」

飛脚「その先生というお方は、どなたですか。」

又「川原市の近くの小川村という所に、中江藤樹先生という方がおられます。先生から『正しい』と思うことを行いなさい、親を大切にしないさい、正直に暮らしなさい。などと、教えてもらっています。」



（9）又「飛脚さんに会えて、本当に良かった。会えなかつたらどうしようかと、心配しましたんや。……ああ、ほつとしました。安心して帰れます。」



又「飛脚さん。これと違いますか？ 家に戻つて、馬の鞍をはずしていました。それでは、これで安心して帰れます。」

きました。又左衛門は、みんなにお酒をすすめて、自分もおいしそうに飲みました。主人もお客様たちも、喜んでお酒を飲みました。

（11）飛脚「馬方は、心のきれいな人ですな。感心しました。どこのどなたですか。」

又「飛脚さんが馬に乗られた川原市の者です。名を名乗るほどの者ではありません。」

飛脚「あんな遠くから、届けてくれたのに、礼もいらないというのではありませんか？」

又「たいへんな忘れ物だったのです。ただ、私は尊敬している先生の所で、いつもいつも良い話を聞かせてもらっています。私だけではなくたくさん的人が、先生から聞いたことを思い出して、正しいことを行うようにしています。」

又左衛門の話を聞いていたみんなは、そんな立派な先生がおられることに驚きました。そして、その教えを勉強し、守つてることに、心を打たれました。



(12)又

「皆さんとおいしいお酒をいたしました。ごちそう

ました。さまでした。それ

ではこの辺で帰らせてもらいま

す。」

馬方又左衛門は、にこにこと笑顔で宿屋の人達に手を振りながら、暗くなつた道を帰つていきました。

この真心あふれる馬方又左衛門の話は、後の人から人へと伝えられ、四百年

を褒め称えた記念碑が建つています。

(おしまい)

※※※※※※※※※※※※
紙芝居「馬方又左衛門」の中で、左記のように文献によつて伝えられているお話を異なる部分があります。ご理解いただき、ご使用ください。

②の文章

「原文」又左衛門が川原市から榎(現大津市和邇)の宿まで、飛脚を送つた。

「別説」川原市から小松(現大津市北小松)の宿まで、飛脚を送つた。

④の文章

「原文」又左衛門が榎の宿まで直行して大金を届けた。

「別説」小松の宿を経由して榎の宿まで

お金を届けた。

解説について

紙芝居は正直な馬方又左衛門が、仕事の疲れもいとわず加賀の飛脚が忘れた大金(二百両)を川原市(高島市新旭町)から七里も離れた榎(現大津市和邇)の宿まで届けたというお話です。

このお話では又左衛門の行動を称えて、藤樹先生の教えが広く地域の人たちにまで浸透していたことを知つていただこうことを主眼としています。

寄稿 会員のひろば

藤樹さんとのご縁

足立 清勝

平成十七年、市制高島市になつた年に新たに高島藤樹会が発足、今年は市制十周年と共に高島藤樹会も十年の記念すべき年を迎えるました。

その間、藤樹先生については全く

の無知であつた私も入会のお誘いを受け、いろいろな場面で関わりを持たせて頂いてきました。中でも大きな節目である平成二十年の誕生日祭では半年間に及ぶ多彩な記念事業が実施され、東京でのイベント開催、市民劇「藤の樹と風とー中江藤樹物語ー」の上演、子ども向けには教材委員会の改訂版藤樹かるたの制作が特に印象強くその場に立ち会えたことは大きな喜びとなりました。

「原文」又左衛門が川原市から榎(現大津市和邇)の宿まで、飛脚を送つた。

「別説」川原市から小松(現大津市北小松)の宿まで、飛脚を送つた。

④の文章

「原文」又左衛門が榎の宿まで直行して

大金を届けた。

生のエピソードを描いた手づくり紙芝居もこの春で十八作を数えました。現在、会報やホームページに順次掲載されており、今まで市内の保・幼・小・中学校や図書館など一部の人にのみ利用されてきましたが、今後は会員や市民をはじめ広く多くの方々にも見て知つていただけます。

藤樹先生が四百年の長きに亘り、地元上小川の人たちの直向なご奉仕の心と先生を慕う多くの市民の方々の熱い思いの中で敬愛され長い歴史を刻んできたことに心から敬服いたします。

私の好きな論語の一節「六十にして耳従い、七十にして心の欲する所にして従えども、矩を踰えず」の言葉を噛み締めて、藤樹先生とのご縁を大切に「五事を正す」を胸に秘め、残りの人生を有意義に且つ、少しでも世の中のお役に立つことができればと感じている今日この頃です。

※※※※※※※※※※※※

私の好きな論語の一節「六十にして耳従い、七十にして心の欲する所にして従えども、矩を踰えず」の言葉を

に従えども、矩を踰えず」の言葉を

書院に係わるまでの私の生活は、藤樹先生に関することが生活の一部になるとは全く予想できませんでした。そんな私でしたので、書院の案内や藤樹先生の教えなどがうまく説明できるだろうかと、とても不安でした。しかし、その不安感や自信のなさを表に出すことを恥と考え、伸びをしながら一年を過ごしてきたと反省しているとき、この原稿依頼を受けました。

今思えば、お参りいただいた方に

多くのことを知つていただきたいと

いう思いよりも、「いかにも私は

知つていますよ」と、自分に恥をか

きたくないという不純な背伸びをし

ていたと思っています。

しかし、説明者がこんな気持ちで

良いのか、と自問するたびに猛烈に

反省させられました。説明に恥をか

きたくないという思いから、せつか

く書院に係わっているのだから藤樹

先生の生き方から学ぼうという想い

に、知らないうちに変わっていたこ

とに気づきました。

この縁を機会に「五事を正す」こ

とが、当たり前のよう自然にでき

るよう、これから時間日々「自

反慎独」しながら「ようこそお参り

くださいまして、ありがとうございます」と、心から接待できるよう

なりたいと思つています。

自分になりたいと思つています。

中学生の 地域学習のきっかけに

弘部 誠

シリーズ⑥ 「伝え継ぐ藤樹先生」

依頼を受け、一学期に安曇川中学一年生の生徒さんを対象に、地域学習のきっかけとして藤樹先生と継体天皇のお話をさせていただきました。

はじめに、現在も定着している安曇川中学校の授業はじめと終わりの

「静座・默想・礼、お願

いします（ありがとうございました）」のあ

いさつは、藤樹先生の「・・・静かに座し、他人が居なくとも、自分を慎み、自分を見つめ、誠実にすること・・・」の言葉をもとに始まって十三年の伝統があり、県内小・中学校に広まつたことを伝え、藤樹先生については次の項目について語りました。

■中江藤樹と熊沢蕃山との関係

- 馬方又左衛門とひきやくの話を金額と馬方の歩いた距離で話す。届けた二百両は少なくとも

現在の二千万円に匹敵するこ

と。

○馬方又左衛門の話を聞いた熊沢蕃山が藤樹先生を訪ねた時、藤樹先生は三十四歳、「翁問答」の草稿をまとめていたが、まだ自分の学間に自信がなかった。そして、「京都や大阪には、名だたる学者の塾も多いではないか」と断るが・・・。熊沢蕃山が先生の教えを受けたのは、わずか八ヶ月余りだったが・・・。

○熊沢蕃山は次のことを実践した藩の学問として藤樹学（良知の学）を取り入れ、岡山藩の政治のよりどころに。

・藩営の手習所百二十三カ所、岡山藩校や閑谷学校の開校を藩主池田光政に進言。

・藤樹先生の息子の弥三郎（後の常省先生）を京都で教える。・藤樹先生の三人の息子や有力な門人を池田光政に推挙。

・藤樹書院を屋敷として修理を行い、三十年間守る。

■熊沢蕃山と池田光政との関係

- 姫路城を築城した池田輝政の孫である池田光政は、岡山藩の三代目藩主。儒教による政治を求め、教育の振興、洪水による難民を借金をして救済、治水、新

田開発などに着手、岡山藩の基礎を築く。“天下の三賢侯”（水戸の徳川光圀、会津の保科正之）と呼ばれた。熊沢蕃山の政治的才能を評価し、側役（側近、指南役）として禄三百石（のちに三千石 現在だと一億五千万円ぐらい）を与える。

なお、光政は、藤樹先生を師として尊敬し、藤樹先生の三人の息子と有力な門人を岡山藩に招き、藩校や庶民の学校・閑谷学校を設置し、教育を振興。

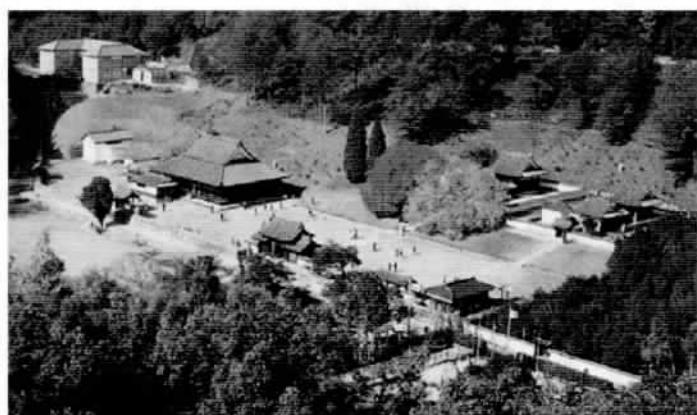
■閑谷学校について

（開校一六七〇年）

○藤樹先生の教えを受けた熊沢蕃山は、閑谷学校（日本最古・世界最古ともされる公立の庶民のための学校）の出発点となつた手習所および閑谷学校の建設の計画を立てる。藤樹先生の息子・弥三郎（後の常省先生）は、閑谷学校開校時の学校奉行（学校の建築、藩の学校経営の総責任者）となる。

○その後、閑谷学校は一七〇一年大改築され、備前焼の瓦の今のよいうな講堂もできた。その講堂は国宝、他の建物は国の重要文化財に。現在は岡山県青少年教育センター・閑谷学校として県内

こうした内容を、私が撮った写真をプロジェクトで映したりしながら話をいたしました。



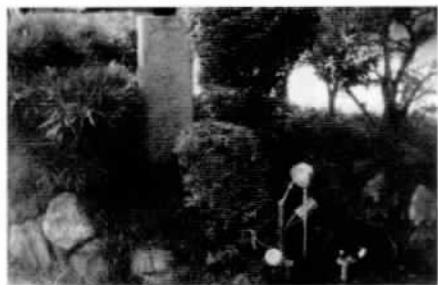
閑谷学校全景

（所在地 岡山県備前市閑谷）
○エピソード・昭和三十四年に瓦のふき替えをしたとき、古い瓦一万枚余りはどれも国宝級の「古備前」。一枚だけを国宝にし、それ以外は秘密の場所に埋められた。この場所は極秘事項

（所在地 岡山県備前市閑谷）
○エピソード・昭和三十四年に瓦のふき替えをしたとき、古い瓦一万枚余りはどれも国宝級の「古備前」。一枚だけを国宝にし、それ以外は秘密の場所に埋められた。この場所は極秘事項

藤樹記念館通信③

「三尺の泉」 山本義雄



三尺の泉

明らかにした人には、世間的に有名でなくとも、片田舎にあってもその徳化は尽きること

藤樹書院西門を潜ると右手に掘り抜き井戸がある。改修されてから滾々と清水が湧き、湧き水が見事であるため、三尺の泉と名付けた。熊沢蕃山の集義和書の中では、「万里の海は一夫に飲ましむ事あつたわざ三尺の泉は三軍の渴をやむるに足ると云えるものなり」とある。これは「万里の広い海の水は塩辛くて一人の男の渴きさえ癒やす事が出来ないが、三尺の滾々と湧き出る泉は三軍もの大勢の兵隊の喉の渴きを癒やす事が出来る」と言う事だ。博学で有能な人で、その心根が名利の念で汚れていては役に立たない。

明徳を明らかにした人は、世間に有名でなくとも、片田舎にあってもその徳化は尽きること

藤樹書院の正面手前に向かって右にあるこの石は、藤樹先生がとてられた石である。藤樹先生は、自分の心に迷いが生じたり、悲しみ、怒りが生じた時には静かにこの石に水をかけ、自分の心を正させていた。このようにいわれのある石である為、子供やおとなの方でも決してこの石に腰をおろしたり足で踏みつけるという事はなかったと言われている。

上小川村では子供のころから藤樹先生を呼ぶとき、身近な存在であり区民皆が親しみを持っていたため「藤樹さん、藤樹さん」と呼んでいた。

がない。藤樹先生は正に「三尺の泉」ごときの人であった。小川村で母に孝養を尽くし、自身の修養につとめ村人や訪れてくる人に間の生きる道を説かれた。蕃山の言葉は藤樹先生の偉大な事を称えた素晴らしい言葉である。

「いわれのある石」



いわれのある石

お願い

寄稿やご意見（藤樹会や本会報等について）をお寄せください。

〒520-1531
高島市新旭町裏庭 2788

三田村治夫（広報担当）迄

TEL・FAX 0740-25-2246
E-mail:mitamura.haruo@ruby.plala.or.jp

- 株式会社 戸井薬局 新旭町安井川
- ウエストレイクホテル 可以登樓
- 株式会社 大山建設
- 株式会社 桑原組
- 有限会社 宏和商事
- 有限会社 白浜荘
- 社会福祉法人 新旭みのり会
- ソエダ 株式会社
- 株式会社 TADコーポレーション
- 鉄屋商事 株式会社
- とも栄 藤樹街道本店
- 中村印刷 株式会社
- 株式会社 中村測量設計
- ニッケイ工業 株式会社
- 有限会社 馬場塗装
- 三田村印刷 株式会社
- 有限会社 綿庄食品店

あとがき

ある日突然、我が家家の池がにぎやかになりました。これまで、黒い鯉が一匹さびしそうに泳いでいたのですが、今は手の指の長さほどの、赤や黒、白や黄色の色鯉二百匹ほどが群れをなして泳ぎ回っています。毎日、家族の誰かが餌をやりにいくので、池に近づくと一斉に寄ってきて、水に入れた指をなめるように泳ぎ回ります。

この色鯉は、「たくさんもらつてきたので、少し池に入れておいたで。」と、近所の方から「おすぐ分け」をしていただいたものです。通る人が「きれいだね。」とひとしきり眺めて行かれます。毎日、かわいい鯉に癒やされています。

かつてはどこのお家も、冠婚葬祭から戻つてくると、近所の何軒かにおすそ分けしたものです。以前に比べると、そのおすそ分けすることが少なくなつてきました。それでも、少し前になりますが、「生の鮎をもらつたので」と言つておすぐ分けいだきました。それでもたくさんなので、さらにおすそ分けしました。

温かい気持ちが添えられた「おそれ分け」が、強い「絆」づくりをしていましたのでしようね。（H・M）

（以上新規）

賛助会員一覧